

で環状の高まりが巡るという形態や時期のみならず、層の特徴や堆積状況・遺物出土状況等で、環状（馬蹄形）貝塚を含めた類例と共通点が多く認められることを指摘した（江原 1999a・b）。またこれら類例との比較作業等によって、環状盛土遺構は決して祭祀的・非日常的な構築物ではなく、関東地方後・晩期において一定程度普遍的な集落の一形態として議論すべきとの意見を提出した。

以上のような状況を踏まえつつ、今回のシンポジウムに関わる幾つかの着目点及び課題の中から、とりわけ盛土層の特徴とその由来及び時期について、寺野東遺跡の調査成果の中から整理しておきたい。

寺野東遺跡の環状盛土遺構は、未調査部分が多く、不明な点が多い。しかしながら、平面形態、層堆積状況及び層自体の特徴等において、盛土ブロック間で、或いは盛土ブロック内においても地点によってかなり差異が認められる点は確認しておく必要がある。とりわけ台地平坦面における盛土堆積状況と斜面における堆積状況では、角度・黒色土の有無・遺構数・遺物量等において大きく異なることから、盛土自体の性質・評価も慎重に検討すべきであろう。台地平坦面H4区における盛土中に「面」を推定できることは、盛土形成過程や集落形成を考える上で注目される。また、盛土遺構範囲内の褐色土についても、削平したローム土をそのまま盛り上げたようなローム質土は必ずしも多くはなく、一定程度変質・変容したものが多い。これらのことと関わって、実際の土層観察において、「包含層」との区別が困難な盛土層も見られたことを改めて指摘しておきたい。更に、t16で確認された堀之内2式期の住居跡（炉35）では、「住居廃絶直後に自然堆積の覆土が形成されず、人為的な盛土がなされた」と考えた。他の地点においても「炉直上の土層が必ずしも推定される住居範囲に限定できないこと、通常の覆土とは異なる様相」に注意し、「盛土自体の成因を考える上で看過できない事象」とした（江原 1997）。

以上のように多次にわたる土の移動等、検討すべき課題を多く残すが、盛土層の由来について、基本的には中央窪地におけるロームを考える。この考えはすべ

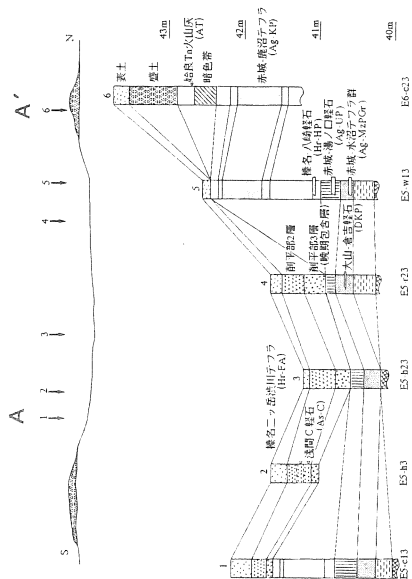
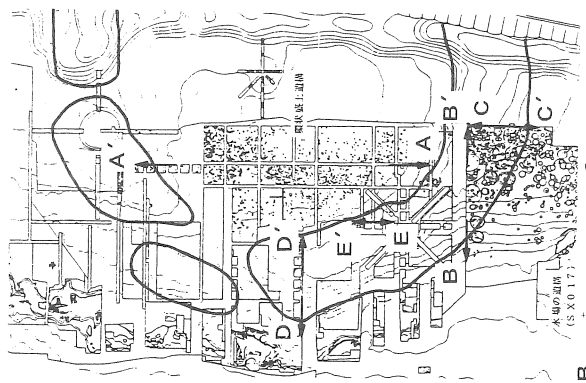
ての環状盛土遺構における中央窪地や盛土の形成要因を一元的に捉えるものではないが、「類例」遺跡において中央窪地のローム面層準から推定される削平と盛土行為との対応関係が認められる例が増えている点に注目したい。但し、削平と盛土形成により、旧地形が大きく変更されている状態を認識しておく必要がある。

盛土の形成時期については、後期前半堀之内1式期から、晩期前半安行3b式期までと捉えているが、これについても問題が多い。とりわけ、北西盛土ブロックの形成は南盛土ブロックと異なり、加曽利B2式以降と判断できる点も、大形の住居跡の存在と併せ、確認しておくべき事項である。盛土が削平したローム土を用いていること、各層中の土器型式が混在していることから、遺物の原位置からの移動が著しいことが推定でき、このことが各層の時期判断を困難とする主要因となっている。また、未調査部分が多いとは言え、出土土器の中で比較的数量の少ない細別型式もある点も再度指摘しておく。

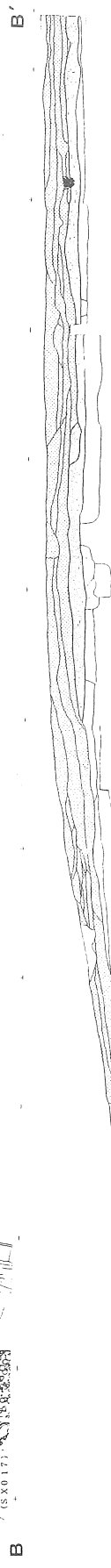
いずれにしても、盛土堆積状態や遺物出土状態等についての各遺跡の相互比較という基礎的な検討は、環状盛土遺構形成要因の解明に向けての第一に必要な作業で今日的な課題である。

文献

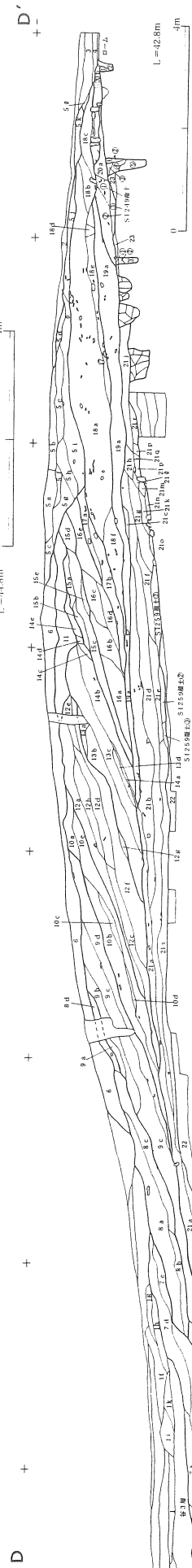
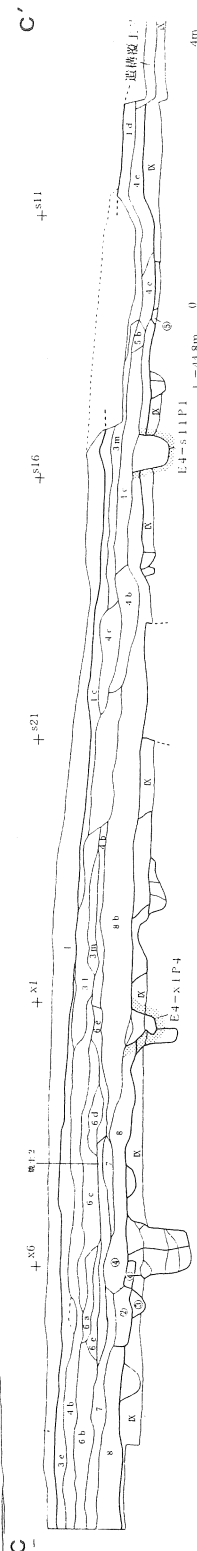
- 阿部芳郎 1996「縄文時代のムラと「盛土遺構」」『歴史手帖』24・8
江原英ほか 1997『寺野東遺跡Ⅴ（縄文時代 環状盛土遺構・水場の遺構編）』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
江原英 1999a「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」『研究紀要』7（財）栃木県文化振興事業団
江原英 1999b「遺構研究 環状盛土遺構」『縄文時代』10
江原英 2001a『寺野東遺跡Ⅲ（縄文時代 住居跡編）』栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
江原英 2001b「環状貝塚・環状盛土遺構」『縄文時代集落研究の現段階』発表要旨
堀越正行 1995「中央窪地型馬蹄形貝塚の窪地と高まり覚書」『史館』26



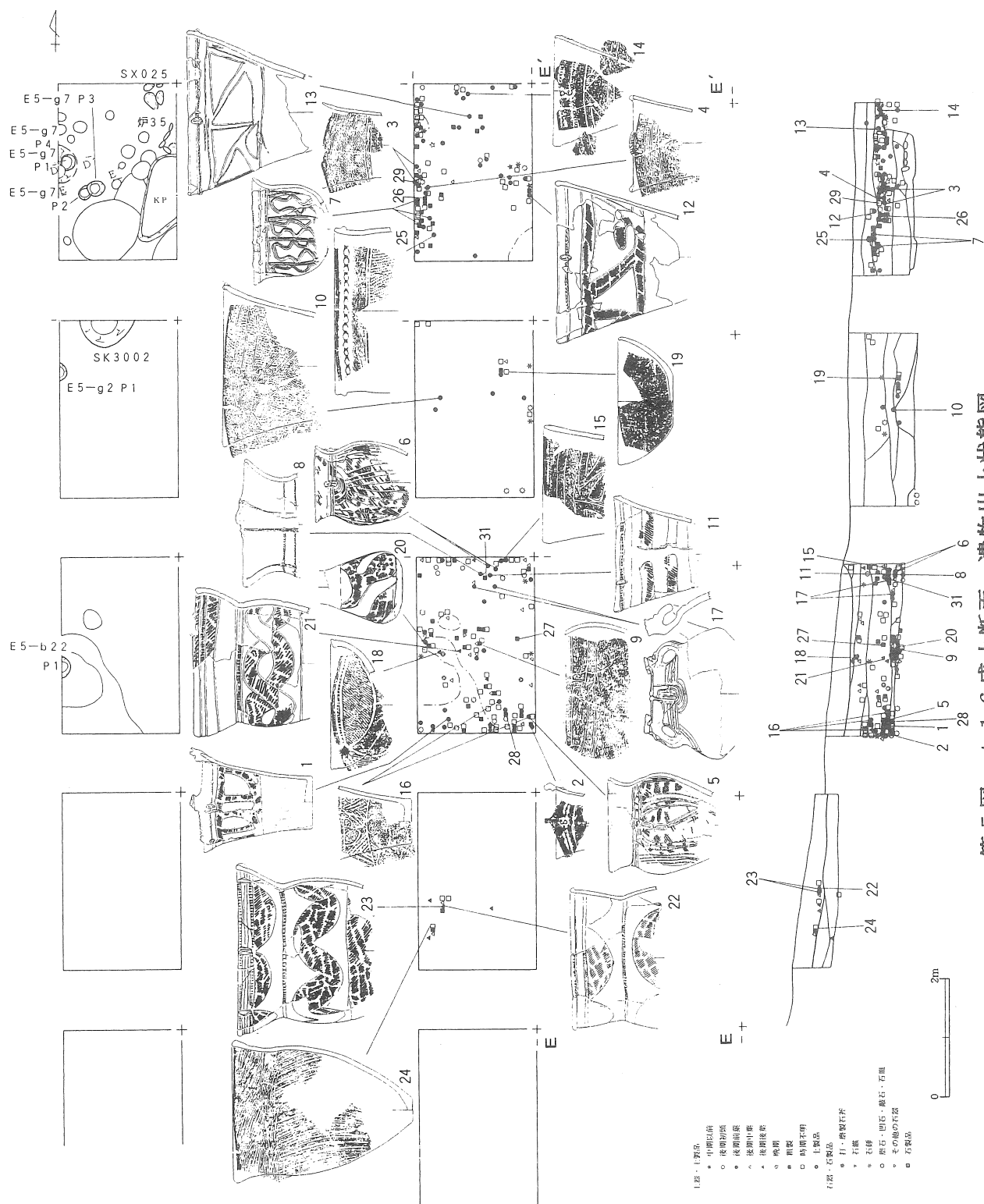
第3図 環状盛土遺構土層柱状図



埋戻土①
埋戻土②



第4図 盛土土層断面図



第5図 t16盛土断面・遺物出土状態図

三直貝塚について

(財) 千葉県文化財センター
吉野健一

1. はじめに

君津市三直貝塚は、太平洋に流れ込む^{はたざわ}畑沢川^{こいと}と小糸川の分水嶺^{ぶんすいりょう}近くの丘陵^{きゅうりゅう}上面および斜面に位置する縄文時代^{じゅんもん}中期から晩期の遺跡で、標高は約 99m に達し、低地との比高差は約 35m である。

1999 年から 2001 年にかけて、^{たてやま}館山自動車道建設にともない、千葉県文化財センターにより遺跡の東側が発掘調査され、縄文時代中期後葉から晩期にかけての集落跡と、それに伴う住居跡、土坑、盛土遺構、貝層などが検出された。特に盛土遺構は、この遺跡を特徴付ける遺構として、集落や貝層との関連を含めて注目される。また 2001 年、2002 年の 2 度にわたり、君津郡市文化財センターにより、遺跡の西側について確認調査が行われ、貝層、および盛土遺構推定位置においてトレンチ調査を行っている（君津市教育委員会 2004）。

今回の報告では、これらの発掘調査成果を踏まえた上で、主に三直貝塚の盛土遺構に焦点を当てて分析を行うこととする。なお千葉県文化財センターにおいて発掘調査を実施した部分については、現在整理作業中であり、発掘調査報告書が刊行されていないため本稿の内容と、本報告の内容との間に、齟齬^{そご}が生じる恐れがあることをあらかじめ断っておく。

2. 三直貝塚周辺の地形的特徴

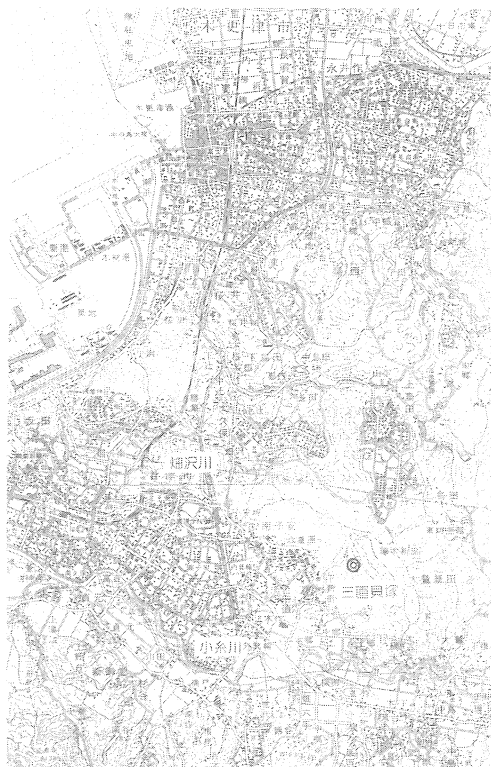
三直貝塚の位置する房総丘陵は、井野長割遺跡のある下総台地と比較すると急峻^{きゅうしん}で、頂上の標高は 100m 前後となる。上面の平たん部は狭く、居住空間として利用できる場所が限定される。

三直貝塚が立地する丘陵は、南北に延びる瘦せ尾根状の地形の先端付近で、周辺の他の丘陵と比較すると、上面が平たんである。遺跡の東側と西側は斜面となっており、東側の斜面はいくつかの小さな谷によって刻まれ、その間には尾根状の地形が形成されている。西側斜面は、北西から大きな箱状の谷が入り込んでおり、現状では崖状となっているが、これは昭和中期ごろ重機による掘削が行われたため、人為的なものである。調査前には、この崖の存在から、遺跡がかなり削平されていると推測していたが、（君津市教育委員 2004）により、丘陵肩部に本来の斜面縁辺が残存していることがわかり、丘陵平たん面の削平はほとんど行われていないということが明らかになった。

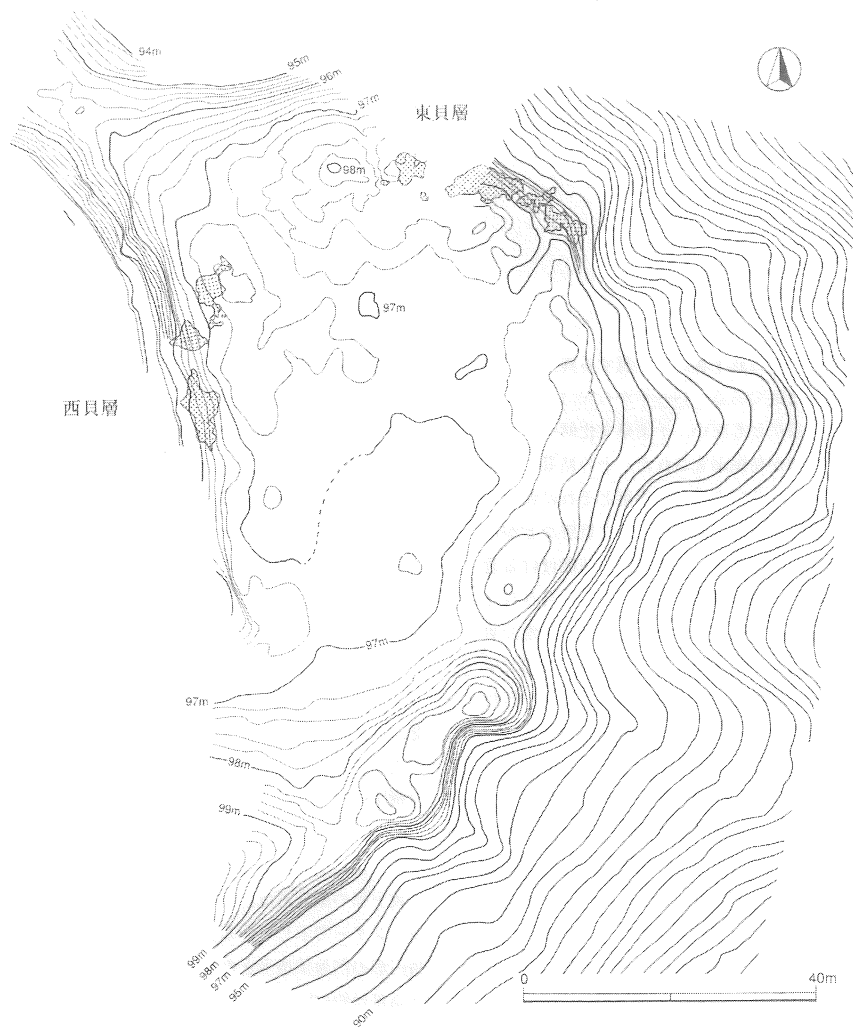
よって現地地形から判断すると、三直貝塚は、南西から入り込む谷の谷頭を囲むような平坦面に集落が展開し、特に西側から北東側にかけて斜面肩部に地点貝層が分布している、いわゆる環状貝塚であるということができ、形態としては、（日暮 1999）の分類方法による第 2 形態の点列環状貝塚に分類できる。

3. 盛土遺構

三直貝塚の盛土遺構については、いわゆる「環状盛土遺構」であるのかという根本的な議論がある。環状盛土遺構に関する認識に研究者により差が存在することから、ここで正否論を展開するのは無意味であるため、議論をしない。ここでは、あくまでも三直貝塚における盛土状に高まる遺構と、実際の土砂の堆積状況について、地表面での観察と発掘調査結果から検討を加え、井野長割遺跡の状況と比較するデータを提供す



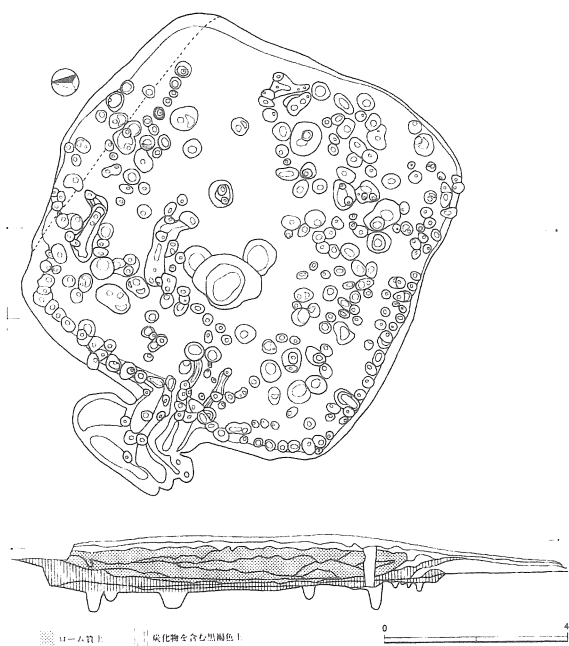
第1図 三直貝塚の位置 (1/10,000)



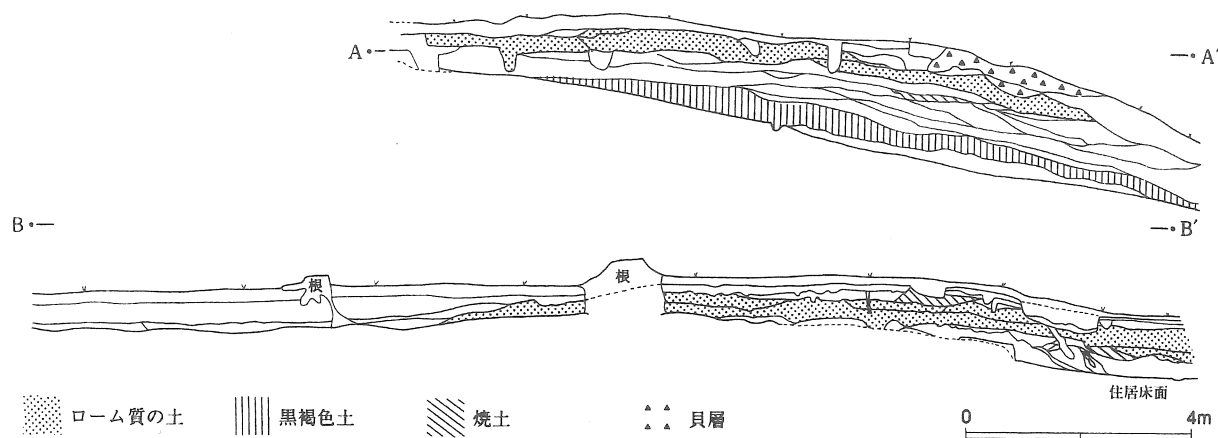
第2図 三直貝塚の地形と貝層・盛土遺構の位置



第3図 三直貝塚遺構分布図



第4図 SI-022 平面図・断面図



第5図 北側斜面（上）および東側平坦面（下）の盛土遺構の断面図（位置は第3図を参照）

るものとする。

(1) 盛土遺構の地表面から見た地形

調査前における地表面の観察では、遺跡中央の凹地を中心として巡るドーナツ状の高まりが確認された

(図2)。高まりの直径が約120mで、凹地との比高差が最も大きいところで約1.5mであった。ドーナツ状の高まりの南西端は開口し、谷頭につながっていた。また、この高まりは、地点により高低差があり、遺跡南東側には、マウンド状となる地点が1か所確認できた。

(2) 土砂の堆積状況から見た盛土遺構

地表面で観察された遺跡の状況と、実際の土砂の堆積状況、そしてそれらと遺構との関係を見ると、決して均質ではなかった。以下は、これら3者の関係を類型化し、述べたものである。

a. 住居跡を埋め立てて盛土状にした地点 (第4図)

主に遺跡の東側から南東側に分布しており、マウンド状の高まりの地点を含む。竪穴住居跡が廃絶された後、黄褐色土で埋められ、さらにその上に新たな遺構が構築されている。このような状況はSI-022、SI-029といった後期後葉から晩期に属する住居跡で確認された。

マウンド状の高まりとなる地点からも縄文時代後期末から晩期の住居跡が重複して検出された。この中で加曽利B式期に属するSI-028はハードローム状の黄褐色土で埋められており、その上部からは後期中葉から晩期前葉(加曽利B式期から安行3a式期)に属する住居跡が重複して検出された(SI-001、SI-011)。この中で、SI-001は遺物の出土量が多いが、明瞭な炉が検出されていないことから、一般的な住居跡ではなく、土器塚的な土器集積施設であった可能性もある。

b. 斜面に厚く土砂が堆積している地点

南側の斜面と、貝層が分布する北側の斜面において顕著である(第3図、第5図)。地表面で観察されたドーナツ状の高まりを断面で観察すると、高まりの内側からピークにかけては土砂の堆積は薄い。それに対しピークより外側では徐々に堆積の厚みを増し、最も

厚い地点で約2.5mに達する。この斜面の堆積から出土する遺物は、縄文時代後期前葉から中葉(堀之内式ー加曽利B式期)の遺物を含む土層が主であり、最上層からは晩期の遺物が少量、堀之内式の土層には中期後葉の加曽利E式土器が混入する。

この中で堀之内式の層が最も厚く、暗褐色土が主で、ローム粒子や炭化物・焼土粒子を含む。単一層ではなく、ロームブロックを多く含む層や遺物が多く含む層などが存在する。その上位には加曽利B式土器を含む黄褐色土層がある。明瞭にソフトロームのようになる地点もあり、層厚は約20cmである。

c. 平坦面に黄褐色土が堆積する地点

遺跡東側に位置するSI-038の北側には厚さ約1mに達する黄褐色土の堆積が確認された(第3図、第5図)。この堆積は、尾根状の斜面に分布する加曽利E式から堀之内式の住居跡を覆うように分布する。土質はソフトローム状で、肉眼では均質に見えるが、この中から炉跡が検出されることから、必ずしも一度に堆積したものではないと考えられる。

4. 中央の凹地

集落中央の凹地の平面形は、南西ー北東に長軸を持つ楕円形で、南西部が谷津の谷頭につながっている。土砂の堆積は黒色土が主体で、厚さ約70cmで、遺物の出土量は極めて少ない。最下層はハードローム面に接し、ローム層と黒色土の間には漸移層は見られず、遺物はローム層に食い込むように出土する。このことは、集落が営まれていた時期には、このローム層上面が常に露出して、土砂が堆積しない状況が維持されていたか、常に掘削を受けていたかのいずれかであろう。いずれにしても凹地が人為的に維持されていた可能性が高い。

5. 盛土遺構を構成する土砂がどこから来たか?

盛土遺構を構成する土砂の由来として以下のようなものが想定される。

a. 遺跡内での移動

具体的には竪穴住居を掘って出た土と、中央凹地を掘削した土の2つが想定できる。特に後者は、凹地地

形の成因と連動する可能性がある。住居跡を埋めている黄褐色土と、地山のローム層について、火山灰分析を実施した結果、地山のローム層には立川ローム層が残されておらず、住居跡を埋めた土の由来が武蔵野ローム層である可能性が高いことが明らかになった。

b. 縄文時代に降下した火山灰

具体的には後期中葉に降下した火山灰が想定される。しかし、前述したように、住居跡を埋めた黄褐色土については、この時期の火山灰ではない。

c. 動植物遺体・食物残滓^{ざんし}

盛土中には多量の骨片や炭化物・焼土が含まれること、北側の斜面には貝層が存在し、その中や周辺から動物遺体が多く検出されることから、暗褐色土の盛土中にも本来多くの動物遺体などの食物残滓が含まれていたと考えられ、これらが腐植土となって盛土の一部を形成した可能性がある。また動物遺体の中には祭祀的な意味合いのものも含まれていた可能性もあろう。

6. 三直貝塚における盛土遺構と凹地

これまで述べてきたことを総合すると、三直貝塚の盛土遺構は、調査前に確認された視覚的なドーナツ状の高まりと、実際に土が盛られている場所が必ずしも一致しないこと、視覚的な高まりは中央の凹地との対比により相対的に作り出されていることが特徴であるといえる。マウンド状の高まりについても、実際の盛土ではなく、自然の地形もしくは地山の削り出しを利用して形成されていることも特徴といえよう。

また、中央の凹地については、本来は自然地形であった可能性もあるが、集落が営まれた時期には、自然

に堆積する土砂の継続的な掃除もしくは除去といった、人為的な営為があったと考えられ、盛土遺構の形成と連動した動きが想定できる。言い換えれば、三直貝塚の盛土遺構は、「凹地とそれを取り囲むドーナツ状の高まり」地形を形成、維持する行為の中で生まれたものであるということができよう。

このような継続した行為は、祭祀的な意味合いがあるものと考えられる。しかし三直貝塚が必ずしも祭祀に特化した遺跡であるというわけではなく、縄文時代後・晩期人の生活の中に祭祀的な行為が深く入り込んでいたと見るべきであろう。単なる祭祀の場ではなく人が生活する集落であることは、くりかえし営まれた住居跡や食糧ゴミの捨て場である貝層の存在が物語っている。

今回は祭祀の具体的な様子については触れなかったが、遺構と遺物の関係を含めて、今後より具体的に検討する必要がある。

〔文献〕

- 日暮晃一 1999 「花見川流域に形成された貝塚の諸特徴」『貝塚研究』4
- 君津市教育委員会 2004 『君津市内遺跡発掘調査報告書2 三直貝塚』
- 吉野健一 2001 「第3回最新出土考古資料巡回展に伴う講演会の記録(2) 君津市三直貝塚の調査」『研究連絡誌』4
- 吉野健一 2002 「三直貝塚」『平成13年度 千葉県遺跡調査研究発表会 発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会

三輪野山貝塚について

流山市教育委員会
小川勝和・小栗信一郎

遺跡の立地と環境

江戸川左岸中流域は、縄文期の遺跡、殊に海進・海退によって貝塚が変容をみせる地域である。縄文時代後晩期の遺跡である流山市三輪野山貝塚は、その古奥東京湾東岸域にあって、近隣の核となる遺跡の一つといえるが、同時に本遺跡から3km圏内には、時期・規模を一にする上新宿貝塚、上貝塚貝塚、野々下貝塚などがあり、共存関係にあったといえる。

三輪野山の舌状台地を江戸川方向から挟り込んだ支谷中央の北側、標高18~20mの台地上及び斜面に展開し、低地との比高差は約10mを測る。貝塚の規模は東西約120m、南北約100mで、南側が開いた馬蹄形である。土地区画整理事業に伴う調査は、貝層部分を公園として保存することとしたため、貝塚周囲の約2.8haに対して実施されてきた。千葉県文化財センターと流山市教育委員会による調査の結果、中央窪地型の環状集落と貝塚を伴う環状盛土遺構の容態が徐々に明らかとなってきている。

集落・貝塚の変遷

縄文時代中期末の加曽利E4式期の土坑や後期初頭の称名寺I式土器の存在は、集落開始時期を示唆するものと考えられるが、住居跡が散在して10軒発見されている称名寺II式期はそれが明確になってくる。また低地での調査により、この時期すでに眼前の支谷は淡水化していたことが判っている。続く堀之内1式期は、貝塚外周に57軒（掘立柱建物跡4棟）もの住居跡が環状に発見されている。この時期は遺構内貝層の段階で、貝塚の形成が始まるのは堀之内2式からのよ

うである。後期中葉期以降は住居跡が内進し、貝塚と重複する場合もある。加曽利B式期9軒、安行2式期2軒が発見されている。ヤマトシジミは徐々に増加していき、晩期には純貝層を形成する。第1と第2貝塚の間に位置する貝層は、安行3c式期の所産で、径5mにも及ぶ。晩期では、中葉の住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟がある。その後の前浦式期・荒海式期は、土器の出土はあるものの遺構は発見されていない。

中央窪地

第1から第5貝塚の内側には、周囲の地山と最大約2mの高低差のある窪地が存在した。直径約80m程度の範囲内になるが、その内部は南北で異なるなど多様であった。窪地南側内には、窪地特有の黒色土層が厚く形成され、その下層の斜面下半部分には、ソフトローム層に酷似する二次堆積土（厚さ20cm内外）が広範囲に貼り付いており、これをローム質土と呼称した。またローム質土とその上層には、焼獣骨片を多量に含む範囲も認められた。地山ローム面の状況は、高位の立川ロームVI層から底面のXc層までが、非常に緩い斜面に削り出されるに連れて、徐々に欠失している。縦断面からは、地山の堆積と無関係に窪地が存在することが読み取れ、窪地は人為的な削平によるものと考えられる。

窪地内の地山直上からは、晩期中葉期（安行3c・3d式）の土器片が多量に出土した。これら土器片は、断面も鋭利であるが散在して出土しており、接合関係に乏しい。土偶・土版・石棒・石剣などの祭祀系遺物も、多量ながら散在して出土した。両方で埋納状態に

あったものは無く、また故意にばら撒かれたような印象がある。窪地中央には、重量約 70 kg の舟形 (25×75×25cm) の大石が横たわり、モニュメント的である。その他、一部に楕円形の土坑集中部分や焼土跡があるものの、窪地内には遺構はほとんど無い。一方、窪地北側においては、緩斜面に墓坑 (後期 4、晩期 15) が集中して検出された。また土器も南側と違って完形に近いものも多く、大洞系土器も出土している。南北の窪地の間にはエプロンステージのような高まりがあり、その機能も気になるところであるが、窪地の平面形状を C 字状とするかのようである。

補足であるが、中央窪地内からは、炉跡 1 カ所での出土を除いて、貝は 1 片たりとも出土していない。規制が強く働き、清浄が保たれていたことが窺われる。

環状盛土遺構

台地西側から南側にかけての斜面には、厚さ約 2 m の遺物包含層が存在した。その範囲は、幅約 10 m・長さ約 45 m に達する。堀之内 1 式期に、急傾斜が緩傾斜に斜面が削られた上、完形に近い土器の投棄と厚く土を盛ってさらに圧縮する行為が行われた。その後の後期中葉期には、ローム主体の黄褐色土層と黒色土層が薄く互層となり、焼獣骨や特殊遺物などを包含する層となる。また、曽谷式期の土器を集中廃棄する層の直上に、盛土を切ってから堆積した黒色土層がある。斜面盛土を横長の楕円型に抉ったような状態であり、徐々に厚く形成された黒色土は炭化物を多く含み、燃焼系の祭祀行為が繰り返された事を想起させる。その上位に厚く堆積する後期安行式期の土層中には、後期全般の土器が混在する。この盛土の堆積状況からも台地上の部分、つまり堤状の高まりがあったと想定されるが、これは畑地の耕作により削平されていた。このため推定になるが、盛土の堆積角度 (約 15°) や中央窪地との位置関係などから、環状盛土遺構の規模は、高さ約 1.5 m・幅約 20 m・直径約 120 m と考えられる。この斜面盛土が南側斜面に存在しないのは、南側台地

縁辺の地山そのものが高く、窪地側を低くすることで必要な高低差を造り得たため、盛土が不要だったに他ならない。一方、地山の低い西側台地縁辺には、集中・継続した改造が必要で、失われた堤状の高まりの裾部分として斜面盛土が残存したものである。盛土を構成する多量の土と遺物については、やはり中央窪地が供給源と考えている。土器については、完形状態に近いものや圧壊しているものもあり、直接投棄される場合もあったようである。

晩期前葉期に台地南西端の一画では、後期斜面盛土のエリアの一部が下位の粘土層まで削り取られるという斜面整形が行われた。このエリアでは、道路状遺構など土地利用がなされたが、晩期中葉期に再び全域をローム起源の土で埋め戻している。これを晩期斜面盛土と呼称したが、中央窪地のさらなる削り込み土の移動先である。このロームを観察すると粒径が非常に細かく、ブロック状のものは認められない。窪地の掘削の仕方が「掘る」というよりは、「削る」という方法で行われたことを示すのであろうか。問題は工具にも及ぶ。このロームによる盛土も晩期前葉期を主体とした遺物包含層である。また中央窪地内出土の土版と晩期斜面整形内の土坑出土の土版の接合例は、土の移動元・移動先を如実に示すものであろう。

さらに貝塚との関連を考えると、廃棄単位を看取できない均質の貝層が斜位に重層する第 5 貝塚の堆積状況は、斜面盛土そのものであることを示している。破碎貝を高率に含み、ヒト大腿骨が単独出土するなど、原位置からの移動の結果といえる。第 1 から第 4 貝塚は台地上にあるが、第 5 貝塚と同様に盛土と考えたい。貝塚を伴う環状盛土遺構である。

図 3 に示した環状盛土遺構推定位置は、第 1 貝塚と第 4 貝塚を結ぶ弧線の半径を 60 m とし、台地南側縁辺の地山等高線の頂点を通る位置にあわせたもので、堤状の高まりの中心線位置を示している。図示していない第 2・3 貝塚はこの円の内側に入ってしまうため、盛土は北側でややひしゃげた楕円形となろうか。



図1 三輪野山貝塚および遺構分布図

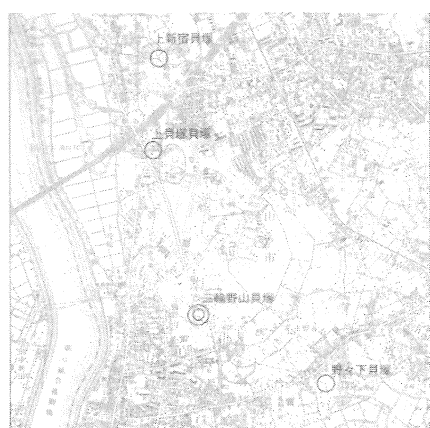
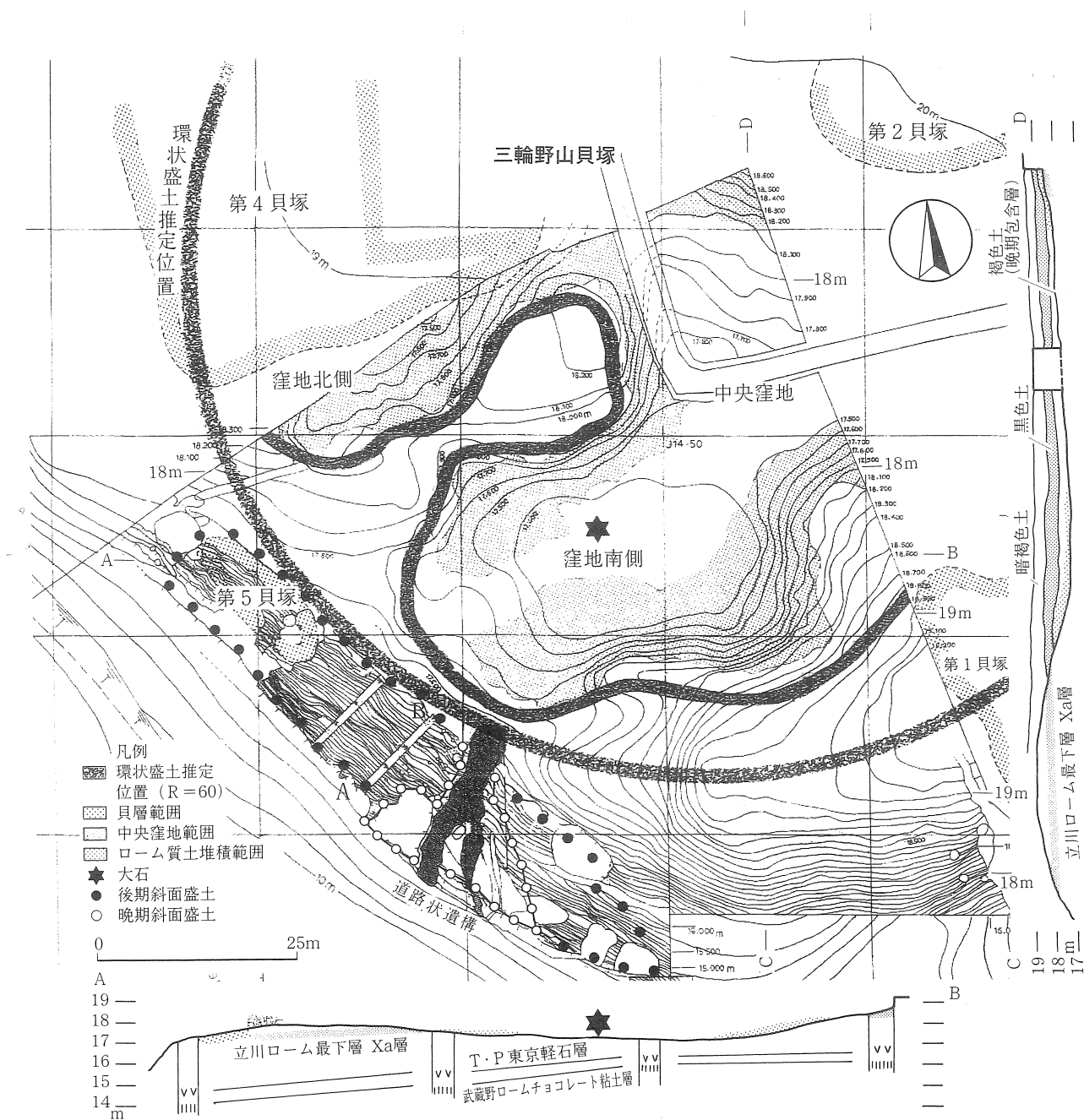


図2 三輪野山貝塚と周辺の遺跡



1 中央窪地南側の大石



第3図 中央窪地と環状盛土遺構平面図 (文献7加筆修正)



2 中央窪地 南側窪地全景

第5貝塚の南端、斜面中位で発見された土坑からは、赤彩鮮やかな異形台付土器や磨石の他、装着状態では無いものの石鏃と鹿角製根挟みがセットで出土しており、斜面部分で唯一墓坑と考えられる遺構である。また、台地縁辺や斜面で発見された土坑の中で後期中葉期のものについては、確実に盛土を掘り込んだはずで、貝層を含むなど注目すべき遺構である。

道路状遺構

晩期斜面盛土を調査により除去した時点で確認された溝と土坑状の遺構は、全長約20m、高低差約6mの道路状遺構であった。掘方がスロープ状の上半部分（ローム層掘削）と階段状の下半部分（粘土層掘削）を踊場（楕円形土坑）で繋ぐ構造となっていて、蛇行しながら傾斜に直交するものと平行する二者がある。投棄された多量の晩期前半期の土器を取り除くと、細かい（割った？）土器片（堀之内1式土器主体～安行3b式土器までが混在）を敷き、粘土・焼獣骨片を混ぜて飛び石状にした舗装路が検出された。また階段状の部分は、片足分の踏代を位置をずらして平行に2条設けた掘方を、溝の底面に連続して掘り込んでいる。ここにも土器敷きは施され、粘土面を滑りにくく加工している。傾斜のきつい階段部分は昇り用で、斜面に平行するものは掘り込みは浅いが降り用と考えられる。この遺構は深さが約1mになる部分も有り、そこには強い意志が感じられる。斜面南西角という位置に在り、昇ればその先には中央窪地の大石が待つ。恐らくは環状盛土も開口していたのではないかと思われる。また降れば、低地の施設（水場遺構など）への通路となる。台地と低地を結ぶ通路ながら、確りと丁寧な造作からは、生活道というよりも特別な使用を考えたい。

出土遺物について

祭祀関連遺物に絞ってみると、土偶が約70点、石棒・石剣が約90点、土版約85点、手燭形土器5点・独鈷石1点などを確認しているが、何れの遺物も破片

での出土である。土器類では、後期斜面盛土で注口土器・異形台付土器や釣手土器、窪地北側で台付鉢の基部が多く出土している。

それに対して生業関連遺物をみると、例えば石鏃の出土点数は異常に多く、全調査区から約360点の出土のうち、中央窪地からの出土が約270点と群を抜いている。また、素材はチャートが7割を超える。蛇紋岩製の小型磨製石斧16点や磨石・石皿片・チャート原石・軽石などの石器類とともに、中央窪地内に廃棄された生業関連遺物が祭祀関連遺物化するかのようである。環状盛土遺構の内側で、長期に亘って何が行われていたのかを探る手がかりの一つにならないだろうか。

環状盛土遺構と貝塚

三輪野山貝塚の遺跡としての消長を概観してみたい。後期初頭に集落として占地された地形的な要因には、自然の窪地の存在があったと思われる。堀之内1式期の住居数が最大であるが、まだ遺構内貝層の時期であるため、貝塚では無く窪地を囲むような配置である。この時期既に環状盛土遺構が志向・設計され、窪地と集落の間に円環状の盛土が造営され始めた。斜面では伐採や台地整形が行われ、台地上では集落内の窪地をさらに掘り窪め、その土を用いた盛土行為が後期末まで継続した。この地業により破壊・埋没した遺構も存在する。また堀之内2式期に始まる、第1～第5貝塚の形成に環状盛土遺構の造営が関与してゆく。また後期中葉～後葉の住居跡は、貝塚・盛土と重複する位置で発見される。居住区域と盛土が同一である可能性がある。この間の中央窪地内での行為は不明であるが、非日常系の遺物の出土が多いことから、祭祀的行為が行われていたであろう。因みに後期斜面盛土は後期末まで続くが、環状盛土遺構は完成したのであろうか。晩期前葉期に後期斜面盛土を壊して、重厚な道路状遺構などを造っている。低地の施設が何か問題であるが、この時期、祭祀の理念や方法に変化が生じたのかもし